

夢追い人

Dreamer's only

「大川仙助紅白」で 全国大会総合優勝したい

大川錦鯉センター
代表者 田中利明さん



田中利明さんは、大川錦鯉センター三代目。会社の創業は一八九〇年頃、ほぼ一二〇年の歴史を持つ。食用の黒鯉の養殖から始まり観賞用の鯉を養殖する事業に発展してきた。世界数十カ国からバイヤーが訪れる。アメリカ、ドイツ、イギリス、ベルギー、香港、アフリカ諸国からも…。実に出荷の七割が輸出。この傾向はバブル崩壊後顕著になったという。

「大川仙助紅白」を作り出したのは四十年ほど前。開発に至った経緯を聞いてみた。

「東京オリンピックのあった一九六四年でした。十八歳で親の後を継ぎ、良い鯉を作りたい！との熱意に燃えていました。それでトラックで錦鯉の本場新潟に向いていったのです。当時は高速道路もなく、一〇〇〇キロ以上国道を走り続けました。新潟に入ると、砂利道が多く、雨が降って坂を登らないことがしばしばで、苦労した記憶があります。」

しかし、旅の疲れを吹き飛ばす様な鯉に出会えた。「宮寅

養鯉場にいた仙介紅白のメスでした。六十五センチという大きさは当時では異常に大きいもので、緋は、真っ赤で、白地もよく、美しい鯉でした。



境を良いものにする事です。それにはまずpHを弱アルカリに保ちます。エアーを送って溶存酸素量を適切にすること。また水温を二十三度から二十五度の間にすることです。そして大川錦鯉センターでは、バクテリアを使った水の浄化システムを使っています。」

さて、もう一つの質問。優秀な錦鯉を造る秘訣は何だろうか。

「稚魚の時、選別をします。この段階が一番大切です。そ

ては、大正三色が六十五部で優勝している。

外国人に人気があるのが、『五色』。赤地の中に白、藍色、黒、中間色が混じる。そしてもうひとつ、『落ち葉時雨』。黒地に黄色い模様が入ります。鱗目がきれいです。それから日本の業者にいま人気があるのが、『白写』。稚魚の時は、真鯉の様だが、成長すると共に色が加わってくる。

さて錦鯉を育てる際、大切な要素は何だろうか。「水の環

してそのとき求められるのが、鑑識眼”です。これにかかっていると言っても過言ではないと思います。優秀な錦鯉を生産できる人は、間違いなく、鑑識眼“があります。」

では、鑑識眼はどのように養われるのだろうか。「経験と良い鯉を沢山見ることだと思えます。長男と次男には、学校を休ませて、小さいときから各地の全国大会、品評会には必ず連れて行ってきました。今この二人は、鑑識眼の点では私より上かもしれませんね。」

夢は何だろうか。
「体長一メートル位の「大川仙助紅白」で、全国大会で総合優勝することです。いまそれを狙える、優良な鯉が育っていると思いますから、期待しています。」